

日本における「翻譯」の誕生

The naissance of “翻譯” in the Japanese context

長沼美香子

(立教大学)

This paper aims to compile evidence from various sources to outline how the Japanese equivalent of the English word “translation” has been written with Chinese characters. To be more specific, it will examine which combinations of Chinese characters have been chosen and preferred in dictionaries and actual texts, and what the possible reasons behind these choices might be in the Japanese context. The word of “*hon-yaku*” was originated in China and became widely used in Japan, but as the findings of this paper show, the combinations of Chinese characters were not exported to Japan exactly as used in China. While this is of primordial importance, it has never been discussed in any literature. Therefore, the author tries to explore what the facts collected for this paper can fundamentally mean for translation studies in Japan.

1. はじめに

本稿は、“translate” “translation” や「翻訳(する)」という語彙そのものが意味する概念やその語源を探究するものではない。そのようなテーマについては、S. Halverson (1999a, 1999b, 2000) が英語、M. P. Y. Cheung (2005, 2006, 2007) が中国語、さらに J. Wakabayashi (2009) が日本語に関してすでに詳細な研究を行っている。また、A. Chesterman (2006) は、「“translation”とは普遍的なカテゴリーか？」という問題提起を出発点として、世界のさまざまな言語における“translation”に関する比較対照研究を試みている。こういった先行研究との重複を避ける意味でも、本稿での筆者の目的はかなり限定されたものであり、日本における「翻譯」という表記をめぐる事実を整理してまとめることである。究極的には日本における翻訳論という大きな課題を視座に入れてはいるが、そこに至る前の原初的な問題として、キーワードである「ホンヤク」という語の表記について、これまで正面から取り上げられることのなかった問題に取り組む。そして願わくは、限られた資料が何かを語るのであれば、その語りに耳を傾けたいと考えている。筆者の問題意識の契機となったのは、次の一節である(以下、引用中の漢文の返り点は省略)。

翻譯は、元は翻譯といった。翻も翻譯も等しく「ひるがへす」の意である。譯の一字で既に異國の言語文字を其國語にあてなほして意味の通ずるやうにすることになつてゐる。隋書^{チンツイチー}「經籍志」に、「翻譯最爲通解。」とあ

るのを以てすればかなり古い成語である。

これは、新居格「翻譯論」(1941)の冒頭部分からの引用(正確には「翻」の旁は「羽」の字形)である。新居は大正・昭和期の評論家で、パール・バック『大地』などの翻訳も手がけた人物である。この文章に出会うまで筆者は、現代日本語では通常、「翻訳」と書いており、「翻譯」という表記は戦前まで使用されていた旧字体なのであろうという程度の認識しかなかった。だが、1941(昭和 16)年に発表された新居の論考では、「翻譯は、元は翻譯といった」として、「翻譯」の方が「翻譯」よりも古いとしている。これは、一体どういうことなのか。まず、諸橋『大漢和辭典第二版』(1994, p. 9491)を調べると、「翻譯」について次のように記述されていた。

【翻譯】ホンヤク 甲國の語を乙國の語になほすこと。宋の高僧傳には譯字不譯音・譯音不譯字・音字俱譯・音字不俱譯の四例が見え、解體新書には直譯・義譯・對譯の三例が見えてゐる。繙譯。

この説明に続いて、〔隋書・經籍志〕〔翻譯名義集〕を出典とする使用例があげられている。『經籍志』は新居も言及しているが、宋代の梵漢辭典『翻譯名義集』にも、「夫翻譯者、謂翻梵天之語、轉成漢地之言」とある。確かに、中国では古来から「翻譯」(現代の簡体字では「翻译」)と表記されているのだ。『大漢和辭典』では、補足として「繙譯」という表記も記しているが、「翻譯」についての説明は、どこにも見当たらない。「翻」「翻譯」「繙」「譯」「訳」の各文字について、同書ではそれぞれ以下のように説明している(例文などは省略)。

【翻】𪛗 ハン ホン 𪛗 ハン ヘン(p. 9489)

𪛗 𪛗 𪛗 とぶ。𪛗 ひるがへる。かへる。𪛗 ひるがへす。かへす。𪛗 解きうつす。譯出する。翻譯。𪛗 つくる。編述する。𪛗 或は翻譯・拵に作る。𪛗 通じて幡・反に作る。

【翻譯】ハン ホン(p. 12967)

𪛗 とぶ。𪛗 かへす。かへる。ひるがへる。ひるがへす。𪛗 水があふれてさかのぼる。𪛗 翻に同じ。

【繙】𪛗 ハン ホン 𪛗 ハン バン(p. 9316)

𪛗 𪛗 みだる。みだす。𪛗 かへす。くりかへす。ひるがへす。𪛗 たづねる。いとぐちを抽いて其の本をたづねる。𪛗 ひもとく。ひらく。𪛗 繙繙は、旗が風にひるがへるさま。𪛗 みだる。

【譯】エキ ヤク(p. 11042)

𪛗 つたへる。のべる。うつしいふ。他國の言を自國の語になほして其の意を通ずる。又、其のことを主る人。𪛗 わけ。わけをとく。經義をときあかす。𪛗 あらはす。𪛗 えらぶ。擇に通ず。𪛗 邦わけ。𪛗 むね。意義。義理。𪛗 ゆゑ。よし。いはれ。理由。

【訳】ヤク(p. 10862)

譯の略字。

「翻譯」は、宋代の韻書である『廣韻』や『集韻』などの漢籍に入っている中国の漢字であり、和製の国字ではない。「翻に同じ」と解説されているように、いわゆる異体字である。だが、「翻譯

「譯」という表記はどうであろうか。この点について、辞書類と実際のテキストからの実例をこれから具体的に検証していくことにする。

2. 日本で使用された辞書における表記

2.1 英華字典

結論から先に言えば、本稿で対象とした英華字典には「翻譯」という表記の使用例はなく、「翻譯」「繙譯」だけである(以下、引用に際しては、表記に直接関係しない情報などを随時省略している)。

たとえば、モリソン(R. Morrison)の *A Dictionary of the Chinese Language* (1822) では、「TRANSLATE out of one language into another, 翻譯; 譯出」とされており、名詞形「TRANSLATION」は、「譯言」である。1843年にメドハースト(W. H. Medhurst)がバタビアで出版した二巻本 *Chinese and English Dictionary: containing all the words in the Chinese Imperial Dictionary, arranged according to the radicals* では、「譯」の説明に「To translate foreign languages; to hand down; to communicate; to cause to see; to convey a message, and introduce parties to each other [...], 繙譯 to translate」(図1)とある。そして、「繙」は「Loose, wide; to take disorderly [...], 繙經 to turn over the leaves of a book: also to translate」(vol. 2, p. 783)とあり、「translate」の意味を示している。それに対して、「翻」は「To fly; to fly about; to return; to fly backwards & forwards」(vol. 2, p. 807)、「翻」は「To fly; also water overflowing and forming into eddies」(vol. 2, p. 1333)であり、単独では、「ある言語を他の言語に変換する」という意味が付与されていない。

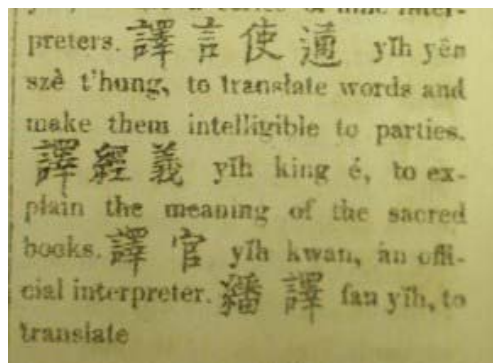


図1: メドハースト『英華字典』の「繙譯」

ロブシャイト(Wilhelm Lobscheid)原著・井上哲次郎訂増の『訂増英華字典』(1883)では、「Translate」の見出し語については、「繙譯、譯、譯出、翻譯、繙、傳話 [...]」とあり、「繙譯」と「翻譯」の両方が使用されており、名詞形については「Translating 繙譯、譯出」「Translation 繙譯、嘸話、譯言、傳言」となっている。

2.2 蘭和、英和・和英、国語など辞書類

日本初の蘭和辞書である『波留麻和解』(通称『江戸ハルマ』)は、ハルマ(F. Halma)の蘭仏辞典を底本としたものであり、稲村三伯らにより 1796(寛政 8)年に完成した。このなかでは「翻譯スル」の表記となっている(図 2)。

vertaald, d.w.	翻譯 スル、 説明 ル、
vertaaler,	人 同上
vertaalen, w.w.	同上
vertaale, z.m.	人 同上
vertaaling, z.v.	同上
* vertaalt,	言 同上
een vertaapte tonge.	舌 同上
vertalen,	翻譯 スル

図 2:『波留麻和解』

1814(文化 11)年に長崎奉行所に献上された『語厄利亜語林大成』は、本木正栄を中心に長崎通詞らが編訳したもので、アルファベット順に配列された英和辞書としては、日本ではじめてのものであったが、辞書というよりは単語集のイメージに近いかもしれない。見出し語「Translate」に対する訳語「翻譯スル」が掲載されている(図 3)。

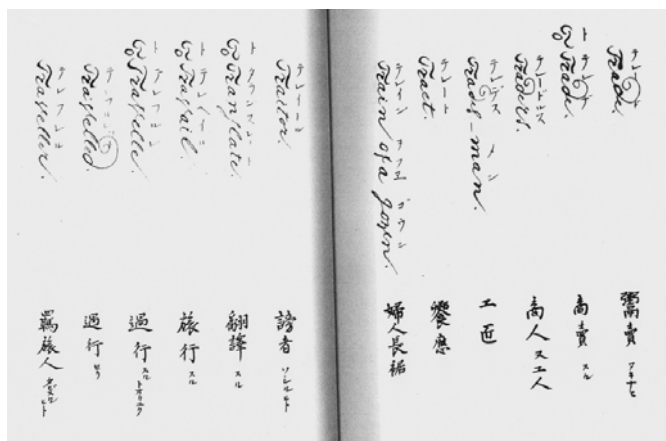


図 3:『諳厄利亜語林大成』

『諸厄利亜語林大成』から約半世紀を経た 1862(文久 2)年に、堀達之助を中心に編纂された『英和對譯袖珍辭書』は、幕末から明治初期にかけて普及していた本格的な英和辞書である。「Translate 翻譯スル、通辯スル、置キ替ル」「Translation 翻譯スルコト、置キ替ヘルコト」「Translator 翻譯者」と、いずれも「翻譯」という表記を採用している(図 4)。

Translating, v. a.	翻譯スル通辯ス、單事替ル
Translation, s.	翻譯スル、單事替ル
Translator, s.	翻譯者
Translucency, s.	透明ナル
Translucent, Translucent, adj.	透明ナル
Translucence, adj.	海ヲ越ス
Transmigrant, adj.	移徙ス
Transmigrating, v. a.	會上任所ヲ替ル、國ヲ替ル
Transmigration, s.	移徙ス、住所ヲ替ル、魂ノ他体ニ移ル
Transmission, s.	置キ替ル、運送ス、送り遣ル
Transmit, v.	下輸出
Transmittal, s.	置キ替ル、運送ス、送り遣ル
Transmitter, s.	置キ替ル、運送ス、送り遣ル
Transmutable, adj.	送り遣ル、輸入ス
Transmutability, s.	替ルハキ
Transmutation, s.	替ルハキ
Transmute, v.	引替、變化セシム

図 4:『英和對譯袖珍辞書』

日本で使用された辞書のなかで、最も早い時期に「翻譯」という表記が登場するのが、1867 (慶応 3) 年初版のヘボン (James Curtis Hepburn) 『和英語林集成』である (図 5)。序文によると、1830 年にバタビアで出版されたメドハーストの英和・和英語彙集とイエズス会刊行の日葡辞書を参考にしながら、「もっぱら生きた教師をたよりとした」とある。1830 年のメドハーストの語彙集には「To translate」の訳語として「ヤク、譯」しか載っていないが、実際には当時「翻譯」という表記が用いられていたことが容易に推測できる。松村 (1966, p. 1) は、この辞書は「幕末から明治初期にかけてひろく用いられた和英辞書としてわが国における英学史上からも貴重な文献であるが、また、日本語資料としても重要な価値をもっている。日本語資料としての本書の価値は、英語で説明された国語辞書として、幕末から明治初期にかけて用いられていた語彙を多く集録している点にある」と解説している。英語の辞書としてのみならず、「国語辞書」として日本語資料を収集した価値をもつヘボンの辞書に「翻譯」の表記が用いられているのは、大変興味深い事実である。なお、本辞書第二版の独訳として、1877 (明治 10) 年に出版された『和獨對譯字林』でも、「翻譯」の表記はそのまま踏襲されている。

HON-YAKU, -szru, ホンヤク, 翻譯, To translate, to interpret, render into another language. <i>Yei-go wo wa-go ni</i> —, to trans-	† H	late from the English language into the Japanese. Syn. NAOSZ. HON-YEN ホンエン 本言
---	--------	--

図 5:『和英語林集成』

同じ書名の辞書でも、版によって内容に異同がある。たとえば『哲學字彙』は、1881 (明治 14) 年の版には “translate” “translation” などの見出し語さえないが、1884 (明治 17) 年の版では「Translation 進行 (物)、翻譯」が追加され、さらに 1912 (明治 45) 年の版では「Translation

移動、翻譯」となっている(図 6)。この変化は、この後見ていくように、「ホンヤク」がどう表記されていたのかを象徴的に示すものとも言える。

Transformation	化(成)	Transition	經過・轉移	Transitoriness	一時性、暫有性、
Transition	經過・轉移	Translation	進行(物)・翻譯	Translation	(Ger. Überführung, Fr. traduction.) 移動、翻譯、
Transmigration	輪廻	Transmigration	輪廻	Transmigration	移住、輪廻、精神
Transmission	形質遺傳(中)			Transmigration of soul	移轉、輪廻、

図 6(1):『哲學字彙』(1881)

6(2):(1884)

6(3):(1912)

同一の辞書内において、表記の統一されていない例も少なくないが、それほど「ホンヤク」の表記はかなり柔軟だったようである。1888(明治 21)年、岩貞謙吉纂譯『新譯英和字彙』では、「Translate」の見出し語に対しては、「翻譯スル。通辯スル。移ス。送ル。替ル。」とあるが、それに続いて「Translation 翻譯。解明。進行(物理學)」「Translator 翻譯者」となっており、「翻譯」と「翻譯」が混在している(図 7)。

Trān'si-to-ry, a.	暫時ノ。揮發ナル。消 失シ易キ
Trans-lāte', v. a. -ed-ing.	翻譯スル。通 辯スル。移ス。送ル。替ル
Trans-lā'tion, s.	翻譯。解明。進行(物理 學)
Trans-lāt/or, s.	翻譯者
Trans-lū'gen-cy, s.	透明

図 7:『新譯英和字彙』

「繙譯」という表記が採用されているのは『英和字彙 初版／第二版』(1873, 1882)、『英和雙解字典』(1886)などである(図 8)。『英和字彙』は、柴田昌吉・子安峻による編集であり、オウグルヴィー(John Ogilvie)の辞書を底本にしている。永嶋(1970, pp. 73-93)によると、『英和字彙』の訳語については、堀達之助の『袖珍辞書』を増補した『改正増補英和對譯袖珍辭書』(堀越龜之助, 1866)やその海賊版とも言われるいわゆる『薩摩辭書』(1869)なども参考した形跡があるが、「総体的にみれば無視してもよい程度」であるようだ。永嶋はむしろ「継承の相よりも断絶の相」を指摘し、「『袖珍辞書』の訳語、訳文が長崎系『和蘭字彙』を引きついで口語的性格を強く持っているのに対し、『英和字彙』は極端なまでに漢字語を好む」と述べている(p. 80)。そして、ロブシャイトの『英華字典』からの影響について、具体的な見出し語をあげながら説明する。永嶋の示した例には「Translation」は含まれていないが、訳語のみではなく、「繙譯」という表記の点からも『英華字典』との強い関連は裏付けられるのではないと思われる。

『譯字彙』であり、ここで「翻譯」という表記が用いられていることと、『言海』の表記とは無関係ではあるまい。

Frank Brinkley・南條文雄・岩崎行親共編『和英大辭典』は、動植物や事物の挿絵や外国人のためのイントロダクションが付いた和英辞書であり、金沢庄三郎編『辭林』は1907年(明治40)年に初版が刊行された国語辞書(その後1911年に大改訂)である。『日本大辭典』は大和田建樹編、『文學新語小辭典』は生田弘治(長江)著である。生田(1913, p. 182)は、当時の文学新語として次のように説明している。

翻譯 外國の書を、日本語に譯す事を云ふ。其一字一句を正確に辿つて譯したものを、逐字譯(直譯)と云ひ、意味丈とつて譯したものを意譯と云ひ、ある一部分丈をひきぬいて譯したものを抄譯と云ふ。原語から直に譯したものを原語譯と云ひ、翻譯から又翻譯したものを重譯と云ふ。たとへば、露西亞の作家の作品を英語に譯したもののから、更に日本語に譯すなど、重譯である。譯の間違つてゐるのを誤譯といふ。

翻譯案 やき直しを云ふ。つまり、原作の或る一部分丈を作りかへてやゝ面目を異にしたものとする事である。

大正から昭和初期にかけての辞書類の事例は十分とは言えないが、「翻譯」という表記が、次第に一般的になっていたという傾向は明らかである。

ここで取り上げた辞書類以外にも、著名なものを含めて“translate”“translation”などに対応する語の表記を一覧にすると表1の通りである。

表1: 辞書の表記一覧(基本的には発行年順だが、改版はまとめている)

	辞書名	発行年	表記	編著者など
1	波留麻和解	1796 寛政 8	翻譯	稲村三伯
2	諳厄利亜語林大成	1814 文化 11	翻譯スル	本木正栄等(編譯)
3	A Dictionary of the Chinese Language	1822 文政 5	翻譯 譯出	R. Morrison(モリソン)
4	An English and Japanese AND Japanese and English Vocabulary	1830 天保 1	ヤク、譯	W. H. Medhurst(メドハースト)
5	Chinese and English Dictionary	1843 天保 14	繙譯 譯	W. H. Medhurst(メドハースト)
6	英和對譯袖珍辭書	1862 文久 2	翻譯	堀達之助(編)

7	和英語林集成	1867 慶応 3	HON-YAKU, -suru, ホンヤク、翻譯	J. C. Hepburn (ヘボン)
8	英華字彙	1869 明治 2	譯スル、繙譯スル 譯的書	斯維爾士維廉士(ウィリアムズ)(著) 衛三畏(鑒定)・柳澤信大(校正訓點)
9	附音 挿圖 英和字彙	1873 明治 6	繙譯	柴田昌吉・子安峻
10	増補 訂正 英和字彙 第二版	1882 明治 15	繙譯	柴田昌吉・子安峻
11 (1)	哲學字彙	1881 明治 14	—	井上哲次郎・國府寺新作・有賀長雄・ 和田垣謙三
(2)	改訂増補 哲學字彙	1884 明治 17	進行(物)、翻譯	井上哲次郎・有賀長雄(増補)
(3)	英獨仏和 哲學字彙	1912 明治 45	翻譯	井上哲次郎・元良勇次郎・中島力造
12	訂増英華字典	1884 明治 17	繙譯 翻譯	羅布存徳(ロブシャイト [W. Lobschid]) (原著)、井上哲次郎(訂増)
13	英和雙解字典	1886 明治 19	繙譯	棚橋一郎(譯)
14	附音 挿圖 和譯英字彙	1888 明治 21	翻譯	島田豊(纂譯)・曲直瀬愛(校訂)
15	漢英 對照 いろは辭典	1888 明治 21	翻譯	高橋五郎
16	新譯英和字彙	1888 明治 21	翻譯スル 翻譯	岩貞謙吉(纂譯)
17	ウエブスター氏 新刊大辭書 和譯字彙	1888 明治 21	翻譯	イーストレーキ・棚橋一郎(共譯)
18	明治英和字典	1889 明治 22	翻譯	尺振八(譯)
19	言海	1889 明治 22	翻譯	大槻文彦
20	文學新語小辭典	1913 大正 2	翻譯	生田弘治
21	井上英和大辭典	1926 大正 15	翻譯、翻譯する 翻譯する	井上十吉
22 (1)	新英和大辭典	1927 昭和 2	翻譯	岡倉由三郎

(2)	新英和大辞典 増補訂正	1933 昭和 8	翻譯	岡倉由三郎
23	三省堂英和大辞典	1928 昭和 3	翻譯	三省堂編輯所(編)
24	齋藤和英大辞典	1928 昭和 3	翻譯	齋藤秀三郎
25	英和活用大辞典	1955 昭和 30	翻譯	勝俣銓吉郎(主幹)

3. テクストのなかの「ホンヤク」

ここまでは“translate”“translation”などの訳語として、日本のコンテキストにおける江戸から明治・大正を経て昭和初期を中心に主な辞書での表記を概観してきた。では実際に「ホンヤク」は、どのように用いられていたのだろうか。ここでは、いくつかのテキストのなかの実例を検討していくことにする。その目的は、本稿のはじめに記したように、概念の意味や語源を遡ることではない。「ホンヤク」の表記から、何が見えてくるのかを事実語らせてみたいと思う。

では、どのようなテキストで「ホンヤク」という語が、実際に使用されている可能性があるだろうか。まず考えられるのは、外国語に出会い、それを翻訳する必要のあった人々が著した「翻訳論」ないしはそれに類するテキストである。翻訳について論じているテキストであれば、当然「ホンヤク」という語が使用されているはずである。また、「翻訳論」という体裁をとってなくても、翻訳書に付されたパラテキストである序文(他の名称としては、「例言」「緒言」「凡例」などペリテキスト)にも、翻訳についての言及があると予想される。これらは、翻訳者本人または識者によって、当該の翻訳に対する態度や方略が表明されているテキストであるからだ。ただし、本稿は量的調査が目的ではないので、限られた代表的なテキストを見ていくことにする。

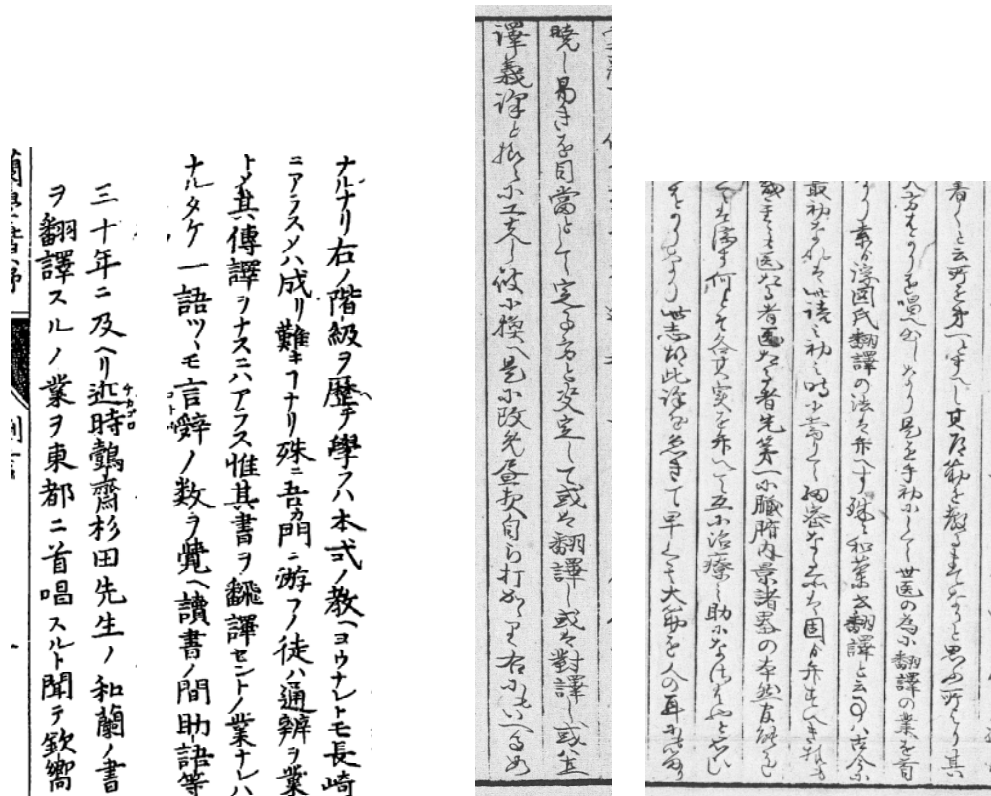


図9-1:『蘭學階梯』

図9-2:『蘭東事始』

江戸中期の1783(天明3)年に成稿、1788(天明8)年に刊行された大槻玄澤『蘭學階梯』は、二巻から成る日本初の蘭学入門書である。このなかでは、「翻譯」と「翻譯」のどちらも数回使用されている(図9-1)。

1815(文化 12)年に書かれた杉田玄白『蘭東事始』には、何度も「翻譯」という語が登場する。西洋語から日本語へのはじめて翻訳書『解體新書』(1774)での苦心などを回想して書かれた内容なので、広義には翻訳論のジャンルに入れても良いかもしれない。「或は翻譯し、或は對譯し、或は直譯義譯と様々と工夫し」という有名な箇所以外にも「翻譯」という語が多数登場する(図 9-2)。このテキストが実際に刊行されたのは、1869(明治 2)年であるが、執筆は江戸期に当たるので、この時期に「翻譯」という表記でこの語が使用されていた事例となる。『蘭学階梯』も『蘭東事始』もオランダ語という西洋語を日本語にするという視点から書かれた江戸時代のテキストである。

翻訳についてのテキストにもかかわらず、「ホンヤク」という語が使用されない例もある。とりわけ明治期前半の翻訳書の序文などには、そのような傾向がある。たとえば、1873(明治6)年の渡部温『例言』『通俗伊蘇普物語』、1884(明治17)年の坪内雄蔵(逍遙)『附言』『自由太刀餘鋭鋒』、1889(明治22)年の森田思軒「叙」(益田克徳譯『夜と朝』)、1885(明治19)年の藤田茂吉・尾崎康夫(朝比奈知泉)『例言』『繫思談』などは、いずれも翻訳について述べた短い文章ではあるが、「ホンヤク」という語を一度も用いていない。ただし、当時「翻訳王」とまで言われた森田思軒は、1887(明治20)年10月に『國民之友』第二卷第十號に、「翻譯の心得」と題

した文章を森田文蔵の名で発表しているし(なお、本号の「目録」(目次)の頁では「翻譯の心得」という表記)、宮島春松の「緒言」『哲烈禍福譚』(1879)、伊澤信三郎譯『鐵烈奇談』(1883)に寄せた荻園閑人(森重遠)の「緒言」(どちらも原著はフェネロンの同一書)では、「翻譯」の使用例もある。したがって、この時期に「ホンヤク」という語が使用されなかったというわけではないが、「ホンヤク」という語が使用できる箇所に「譯述」「譯者」「譯す」などという言い回しが用いられている場合も少なくなかったということである。坪内逍遙宛の書簡で森田思軒は、「譯の難きは其の一辭一句に就て之を邦語に翻へすの難きにあらず…」と書いており、「譯」「翻へす」という表現を用いている。

明治期後半から大正期に出版された翻訳書の序文などでは、「翻譯」という表記を選好する傾向が顕著になってくる。たとえば、1895(明治28)年の高橋正次郎「凡例」『自由之權利』、1897(明治30)年の福澤諭吉『福澤全集緒言』、1905(明治38)年の上田敏「海潮音の序」『海潮音』、1910(明治43)年の昇曙夢「自序」『露西亜現代代表的作家六人集』、1913(大正2)年の生田長江「譯者の序」『サラムボウ』、1913(大正2)年の岩野泡鳴「譯者の序」『表象派の文學運動』、1925(大正14)年の竹内謙二「書後」『アダム・スミス國富論』などでは、すべて「翻譯」という表記だ。なかでも著名な『福澤全集緒言』の冒頭は、「四十年來余が著述又は翻譯したる諸書類を集めて新に版行せんとするに當り、聊か其趣意を一言して卷首に記し置かんとす」と始まっている。

英語学習書においても、訳読という観点から「ホンヤク」が取り上げられている。そのような書物の著者は英語の教師という立場で執筆しているので、この種のテキストでは英和辞書類との関連も考慮する必要がある。1897(明治30)年の外山正一『英語教授法』と1908(明治41)年の高橋五郎『英文譯解法』では、「翻譯」という表記が使用され、1910(明治43)年の生田長江『英語獨習法』では「翻譯」が用いられている。外山はスペンサーの社会学を日本に紹介した、大学や政府で要職を務めた人物である。高橋は『漢英對照いろは辭典』(「翻譯」の表記使用)などの辞書も編纂した英文学者、評論家であり、生田は『文學新語小辭典』(「翻譯」の表記使用)も手がけた文学者である。

表記を決めるのは、著者本人ばかりでなく、出版社や編集者の意向など、さまざまな要因が関係すると思われる。したがって、同じ著者であっても表記が一定であるとは限らない。

たとえば、森鷗外に「戯曲の翻譯法を説いて或る批評家に示す」という文章がある。これは、1891(明治24)年3月18日から21日に『國民新聞』という新聞に連載されたものである。1909(明治42)年10月に『文章世界』(田山花袋主筆)という雑誌は、「予が翻譯の態度」という翻訳の特集を組んでいる。ここには、数名の文筆家の論考が寄せられているが、森林太郎の名で『即興詩人』時代と現時の翻譯」という文章が入っている。この特集には他にも内田魯庵が「原文の印象と訳文の趣致」を書いており、魯庵の論考でも「翻譯」という表記が使用されている。ただし、これに先立ち1906(明治39)年には、同雑誌に末松謙澄の談話筆記が載っているが、その題名は「翻譯上より見たる日本文と歐文」であり、その文中の表記も「翻譯」となっている。このように、「翻譯」か「翻譯」かは雑誌の編集方針とも言えないほど、柔軟に表記されている側面もある。鷗外が『心の花』(1913)に寄稿した「譯本ファウストに就いて」では、短い文章

のなかに「翻譯」と「翻譯」が混在している。「大抵譯本に添へて書くべき事は、原書の由來とか原作者の傳記とか云ふもので、その外は翻譯の凡例のやうな物であろう」(p.2)という文の次のページには、「そんなら翻譯の凡例はどうかと云ふに、私は實際凡例として書く程の箇條を持つてゐない。總て此頃の私の翻譯はさうであるが…」(p.3)(図10)という箇所が出てくるのである。また、有名な「飴玉とマクロン」の逸話が語られる「翻譯に就いて」と題された鷗外の文章は、『現代二十名家文章作法講話』(1914)に収録されたものである。以上見てきたように、同一人物の文章でも、たとえば鷗外の場合は、「翻譯」も「翻譯」どちらも同程度の頻度で使用されていることが判明した。

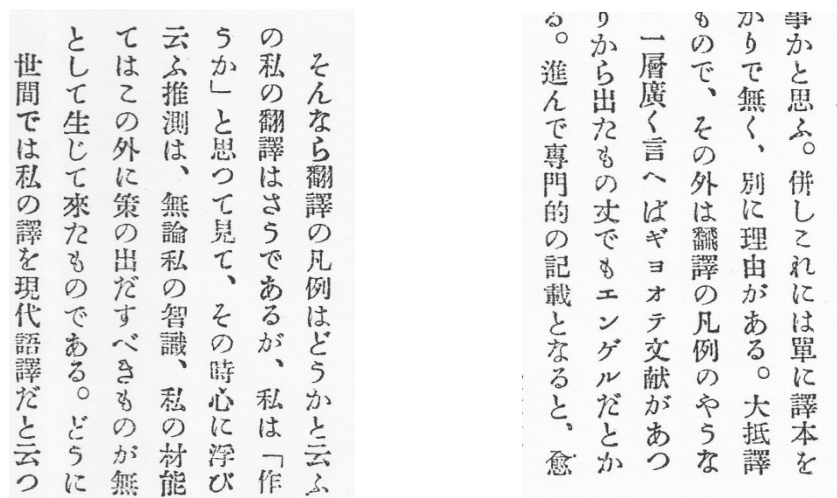


図10:「譯本フアウスト」 p.2(右)とp.3(左)

実際のテキストにおける「ホンヤク」の表記について、「翻譯」と「翻譯」がかなり自由に用いられていること、そして「繙譯」の使用例がないことが確認できた。だが、明治後期から大正・昭和初期にかけて、「翻譯」のほうが圧倒的に多いという傾向は明確に認められる。ただしこの時期にも、「翻譯」という表記が全く使用されていなかったということではないし、限られた事例にもとづいた結果であることにも留意しなければならない。

4. 考察

現代のテキストでは、特段の理由がない限り「翻訳」という表記が一般的である。では、われわれが現在使用している辞書類では、どのように表記され説明されているだろうか。具体的に確認しておこう。

(本稿では、たとえば『デジタル大辞泉』の次のような意味での使用例は、一応除外する。『³細胞質内にあるリボソーム上で、運搬 RNA(リボ核酸)が、伝令 RNA の遺伝情報としての塩基配列を読み取り、それに対応するアミノ酸を運んでたんぱく質に合成する過程』)

『日本国語大辞典 第二版』(2001, p. 278)

ほん-やく【翻訳・翻譯】【名】①ある国の言語・文章を同じ意味の他国の言語・文章におきかえること。また、その文章。*観智院本三宝絵(984)下「此大般若経は、もろこしの太宗の時麟徳年中に玄奘三蔵はじめて翻訳して」*ぎやどべかどる(1599)上・二・一「御主わがばすとるにて在ますと翻訳し給ふ者也」*随筆・秉燭譚(1729)二「仏典は梵言なれども、翻訳はみな華人、当時の語を以てうつしたるものなれば」*蘭東事始(1815)下「これを手初にして、世医の為に翻訳の業を首唱せしなり」*東京日日新聞-明治一六年(1883)七月二日「図書を著作し又は外国の図書を翻訳して出版せんとする者は」*翻訳名義集一序「夫翻訳者、謂翻梵天之語、転成漢地之言」②原語を、その語の意味に相当する日本語の単語でおきかえること。また、その文章。*解体新書(1774)凡例「訳有三等。一日翻訳。二日義訳。三日直訳」*蘭東事始(1815)下「或は翻訳し、或は対訳し、或は直訳・義訳と、様々と工夫し」③わかりにくいことば、特殊なことば、また符号などを一般的なやさしいことばに言いかえること。また、そのことば。*羅葡日辞書(1595)「Etymologia 〈略〉コトバノヤワラゲ、fonyacu(ホンヤク)、チュウ」*布令字弁(1868-72)〈知足蹄原子〉二「翻訳 ホンヤク カエシトク」発音〈標ア〉〇〈京ア〉〇 辞書 色葉・文明・饅頭・黒本・日葡・書言・ヘボン・言海 表記 翻訳(色・文・饅・黒・書・言) 翻譯(へ)

『角川古語大辞典 第五巻』(1999, p. 362)

ほんやく【翻譯】名・動サ変 漢語。ある言語で表された文を自国語など他の言語にうつしかえること。「Fonyacu 〈物事を他国語で説明すること、または、他国語にうつしかえること〉」[日ポ]「此大般若経は、もろこしの太宗の時麟徳年中に、玄奘三蔵はじめて翻訳して」[三宝絵・下]「和蘭書翻訳といふ事は、古今に無き所の最初なれば」[蘭東事始・下]

これが、国語と古語に関する現代日本の辞書における説明である。こうして見ると、表記には一定の基準などないのではないかと感じられる。けれども、微妙ではあるが、表記によって喚起される問題から何かが見えてくる。

そもそも「ホンヤク」という語は、漢籍に使用例が見つかる漢語である。中国の辞書類では、「繙譯」「翻譯」の2種類の表記があり、日本の辞書類には「繙譯」「翻譯」「翻譯」の表記が見つかった。「翻譯」という文字は「翻」の異体字であり、日本でつくられた国字ではないが、「翻譯」という組み合わせの表記は、中国から伝わったものではないと言えそうである。また、限られた資料の範囲ではあるが、実際のテキストでは「繙譯」の使用例は一例もなかった。

実例では「翻譯」と「翻譯」の2種類の表記はどちらも用いられており、同一のテキストに2つの表記が混在しているほどであったが、明治半ば以降から大正・昭和初期にかけては、「翻譯」という表記のほうが、実際のテキストで好まれて使用されるようになった傾向は、何を語っているのであろうか。

いわゆる異体字という点では、「翻」「翻譯」「繙」はいずれも「ひるがえす」などの非常に類似した意味と「ハン、ホン」などの音をもつ文字であるので、どれを用いても大差ないように思われる。もっとも「翻」と「繙」には「譯」に近い意味も含まれているので、この点では「翻譯」が一番不利な文字であるという側面もある。ここで疑問に思うのは、ではなぜ「翻譯」が日本で選好されるよう

になったのか、そしてなぜ「繙譯」は、日本では実際のテキストで使用されることがなかったのかという理由である。この問題を追究した文献は、現在までのところ、入手できていない。したがって、限られた辞書類とテキストからの具体例を前に、現時点では想像力を駆使するしかない。文字の形は何かを語っているのだ。ひとつの可能性として、筆者は一先ずこう考える。「羽」よりも「飛」のほうが画数も多く、視覚的に勢いがあり格好が良いではないか。「翻」と比較したとき、「繙」はいかにも地味な感じがする。「譯」単独で「ある言語を他の言語に変換する」という意味をすでに伝えているのであれば、組み合わせに用いる文字に求められるものは何か。「譯」の前に置かれる文字には、西洋思想を取り込む意気込みを感じさせるものが相応しい。これが、「翻譯」の表記が日本で誕生し、異体字にもかかわらず好まれた理由かもしれない。

一般に言われているように、漢字には「形・音・義」があり、「形」も大切な要素なのである。とりわけ近代以降、日本人が西洋語を大量に翻訳して急激な近代化にまい進した時代においては、「翻譯」という文字の形そのものに意味があったと言える。

5. おわりに

本稿は限られた資料の範囲で、「翻譯」の誕生をめぐる具体的な例を辞書と実際のテキストから検討してきた。日本における「ホンヤク」の表記をめぐる、いわばラングとパロール／エクリチュールに着目してきたわけである。たかが表記だという印象もあるかもしれないが、根源的な問題を包含していると思われる。日本の「翻訳論」において、これまで見落とされてきた視点から、本稿では一定の事実を提示することができたと考えている。

最後に補足しておきたいことがある。台湾や韓国では「翻譯」という表記が用いられている。これは、いつごろから、どのように使われ始めたのだろうか。近代以降に日本から伝わったものなのか、中国語の文字の異体字をたまたま用いるようになったのか、それとも、全く別の事情か独自の経緯があったのか。また、もうひとつの漢字文化圏であるベトナムではどうなのであろうか。本稿ではこれらの点に関しては、考察が及んでいない。今後の課題として、東アジアの漢字文化全体を考えたときに、さらに新しい地平が開かれるかもしれない。この分野に詳しい専門家からのご教示を待ちながら、本稿を結びたい。

【謝辞】

柳父章氏と永田小絵氏から貴重なご助言をいただきました。ここに記して、感謝の意を表します。

.....

【著者紹介】長沼美香子 (NAGANUMA, Mikako) 立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科特任准教授。日本通訳翻訳学会理事。

.....

【参考文献】

- Chesterman, A. (2006). Interpreting the meaning of translation. *A man of measure: Festschrift in honour of Fred Karlsson on his 60th birthday, A special supplement to SKY journal of linguistics*, vol. 19, 3-11.
http://www.ling.helsinki.fi/sky/julkaisut/SKY2006_1/1FK60.1.1.CHESTERMAN.pdf
- Cheung, M. P. Y. (2005). 'To translate' means 'to exchange'? A new interpretation of the earliest Chinese attempts to define translation ('fanyi'). *Target*, 17 (1), 27-48.
- Cheung, M. P. Y. (Ed.) (2006). *An anthology of Chinese discourse on translation, vol. 1: From earliest times to the Buddhist project*. Manchester: St. Jerome.
- Cheung, M. P. Y. (2007). On thick translation as a mode of cultural representation, In D. Kenny & K. Ryou (Eds.), *Across boundaries: International perspectives on translation studies* (pp. 22-37). Newcastle: Cambridge Scholars Publishing.
- 福澤諭吉(1897).『福澤全集緒言』時事新報社.
- 藤田茂吉・尾崎庸夫(朝比奈知泉)(合譯)(1885).『繫思談 初編』報知社.
- Halverson, S. (1999a). Conceptual work and the 'translation' concept. *Target*, 11 (1), 1-31.
- Halverson, S. (1999b). Image schemas, metaphoric processes, and the 'translate' concept, *Metaphor and symbol*, 14 (3), 199-219.
- Halverson, S. (2000). Prototype effects in the 'translation' category, In A. Chesterman et al. (Eds.), *Translation in context: Selected contributions from the EST congress, Granada, 1998* (pp. 3-16). Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.
- Hepburn, J. C. (1867/1966).『和英語林集成 復刻版』北辰.
- 堀達之助(編)(1862).『英和對譯袖珍辭書』[出版者不明].
- イーストレーキ・棚橋一郎(共譯)(1888/1995).『ウエブスター氏新刊大辭書 和譯字彙』(三省堂藏版)ゆまに書房.
- 生田長江(1910).『英語獨習法』新潮社.
- 生田長江(譯)(1913).『サラムボウ』博文館.
- 生田弘治(長江)(1913).『文學新語小辭典』新潮社.
- 稲村三伯(1776/1997).『波留麻和解』ゆまに書房.
- 井上哲次郎・国府寺新作・有賀長雄・和田垣謙三(1881).『哲學字彙』東京大學三學部.
- 井上哲次郎・有賀長雄(増補)(1884).『改訂増補 哲學字彙』東洋館.
- 井上哲次郎・元良勇次郎・中島力造(1912).『英獨仏和 哲學字彙』丸善.
- 井上十吉(1926).『井上英和大辭典』井上辭典刊行會.
- 伊澤信三郎(譯)(1883).『經世指針 鐵烈奇談』白梅書屋.
- 岩野泡鳴(譯)(1913).『表象派の文學運動』新潮社.
- 岩貞謙吉(纂譯)(1888).『新譯英和字彙』積善館.
- 加藤知己・倉島節尚(2000).『幕末の日本語研究 W.H.メドハースト英和・和英語彙——複製と

研究・索引』三省堂.

勝俣銓吉郎(1955).『研究社英和活用大辭典』研究社辭書部.

羅布存德(原著)・井上哲次郎(訂増)(1884/1995).『訂増英華字典』(藤本氏蔵版)ゆまに書房.

益田克徳(譯)(1893).『夜と朝』博文館.

松村明(1966).「解説」『J.C.HEPBURN 和英語林集成 復刻版』北辰.

Medhurst, W. H. (1830). *An English and Japanese and Japanese and English vocabulary.*

Batavia.

Medhurst, W. H. (1943). *Chinese and English Dictionary*. Batavia: Parapattan.

宮島春松(譯)(1879).『哲烈禍福譚』大盛堂.

本木正栄等(編譯)(1814/1976).『諳厄利亜語林大成 大槻本』雄松堂書店.

森田文蔵(思軒)(1887).「翻譯の心得」『國民之友』第二卷第十號. 19-22 頁.

森田居士(思軒)(1892).「思軒居士の書簡」『早稲田文學』第貳拾參號. 361-365 頁.

森鷗外(1891).「戲曲の翻譯法を説いて或る批評家に示す」『國民新聞』.

森林太郎(鷗外)(1909).「『即興詩人』時代と現時の翻譯」『文章世界』第四卷第十三號. 14-16 頁.

森林太郎(鷗外)(1913).「譯本フアウストに就いて」『心の花』十七の五. 1-8 頁.

森鷗外(1914).「翻譯に就いて」『現代二十名家文章作法講話』東京萬卷堂.

諸橋轍次(1994).『大漢和辭典 第二版』大修館書店.

Morrison, R. (1822/1996). *A dictionary of the Chinese language. Part III*. ゆまに書房.

中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義(編)(1999).『角川古語大辭典』角川書店.

永嶋大典(1970).『蘭和・英和辭書發達史』ゆまに書房.

日本英学史料刊行会(編)(1982).『長崎原本「諳厄利亜興學小筌」「諳厄利亜語林大成」研究
と解説』大修館書店.

日本国語大辭典第二版編集委員会小学館国語辭典編集部(編)(2001).『日本国語大辭典
第二版』小学館.

新居格(1941).「翻譯論」櫻木俊晃編『國語文化講座』朝日新聞社.

昇曙夢(1910).『露西亜現代代表的作家六人集』易風社.

岡倉由三郎(編)(1927).『英和大辭典』研究社.

岡倉由三郎(編)(1933).『英和大辭典 増補訂正』研究社.

大槻文彦(1889).『言海』[出版者不明].

大槻玄澤(1788/2000).『蘭學階梯』ゆまに書房.

齊田訥於・那波大吉・國司平六(1877/1981).『和獨對譯字林』三修社.

齋藤秀三郎(1928/1979).『齋藤和英大辭典』名著普及会.

三省堂編輯所(編)(1928).『三省堂英和大辭典』三省堂.

尺振八(譯)(1889/1995).『明治英和字典』(六合館蔵版)ゆまに書房.

柴田昌吉・子安峻(1873).『英和字彙』日就社.

柴田昌吉・子安峻(1882).『英和字彙 第二版』日就社.

- 島田豊(纂譯)・曲直瀬愛(校訂)(1888/1995).『附音挿圖 和譯英字彙』ゆまに書房
- 惣郷正明・飛田良文(編)(1986).『明治のことば辞典』東京堂出版.
- 末松謙澄(1906).「翻譯上より見たる日本文と歐文」『文章世界』第一卷第十號. 2-5 頁.
- 杉本つとむ(編)(1981).『江戸時代翻訳日本語辞典』早稲田大学出版部.
- 杉本つとむ(編)(1994).『杉田玄白集』早稲田大学出版部.
- 高橋五郎(1888).『漢英對照いろは辭典』(小林家蔵版).
- 高橋五郎(1908).『英文譯解法』同文館.
- 高橋正次郎(譯)(1895).『自由之權利』[出版者不明].
- 竹内謙二(譯)(1925).『アダム・スミス國富論』有斐閣.
- 棚橋一郎(譯)(1886/1995).『英和雙解字典』(丸善商社蔵版)ゆまに書房.
- 外山正一(1897).『英語教授法』大日本圖書.
- 坪内雄蔵(逍遙)(1884).『該撒奇談 自由太刀餘波銳鋒』東洋館.
- 上田敏(譯)(1905).『海潮音』本郷書院.
- 渡部温(譯)(1873/2001).『通俗 伊蘇普物語』平凡社.
- Wakabayashi, J. (2009). An etymological exploration of ‘translation’ in Japan. In J. Wakabayashi & R. Kothari (Eds.), *Decentering translation studies: India and beyond* (pp. 175-194). Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.
- 斯維爾士維廉士(ウィリアムズ)(著)・衛三畏(鑒定)・柳澤信大(校正訓點)(1869/1995).『英華字彙』ゆまに書房.